

## 畜産試験場図書室

誌名	日本農学図書館協議会会報
ISSN	03858081
著者	田中, 俊
巻/号	52号
掲載ページ	p. 17-25
発行年月	1984年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



# 畜産試験場図書室

(Library of the National Institute of Animal Industry)

田 中 俊\*

## はじめに

畜産試験場は、大正5年4月に当時の農商務省内に設置され、大正6年に千葉県千葉郡都村(千葉県青葉町)の約65ヘクタールの敷地へ、157棟を建設して移転した。以来60数年を経過するうちに、畜産試験場は都市化の波をかぶり住宅に取り囲まれてしまったため畜産研究のための立地条件としては適当でなくなった。さらに、施設も老朽化したので、国家的事業である世界的水準の筑波研究学園都市建設事業に参画し、昭和55年1月1日に移転した。

筑波研究学園都市は、資源の乏しい日本が、国際社会で生きぬくための原動力を生産するのに必要な技術開発をおこなうための頭脳都市になることをめざしていた。したがって、施設も設備も機械も世界的水準を目標に整備された。しかし、建設を終った問題は、施設全体の規模や機能の拡大強化による関連経費の膨大な増加であった。このため、移転後における図書の拡充整備はもろに影響を受け、図書関係予算の削減を実施した機関もあらわれている。

このようなきびしい財政事情は、これからも継続するものと考えられる。

この稿では、当場の図書室の建設経過や概況の紹介と同時に、少ない予算を有効利用しての図書館活動についても、ふれてみたい。

## 1. 図書室の建設

新設図書室の建設は面積確保の交渉から始まった。筑波移転準備室は建設基準から、 $2\text{m}^2 \times 140\text{人}$ (研究員定員) $= 280\text{m}^2$ にすると通告してきた。しかし、当時の図書室は6か所に散在していたとはいえ、総計 $322\text{m}^2$ を占有していたので、現在の蔵書数と将来蔵書数を考慮して $438\text{m}^2$ 要求案を図書委員会で作成し、交渉の結果 $408\text{m}^2$ に決定した。

しかし、当時の図書室は収納書架の増設のため閲覧スペースをほとんどとられていたので $408\text{m}^2$ でも相当の狭まさが予想された。そこで考えたことは、蔵書数の増大を極力防止するため、増加したら古いものから共同利用施設の保存図書館へ移管して蔵書数を調節する方針をきめることであった。移転の数年前にも蔵書の整理を考え、古い図書を他の機関へ移管して整理しようと計画したことがあったが、古いものでも残すべきだと主張する一部研究員の意見によってつぶされたことがあったのでこの方針は公表しなかった。

---

\* Takashi Tanaka, National Institute of Animal Industry, Yatabe, Tsukuba, Ibariki.

農園協会報, No. 52, 1984-2

## 2. 図書室の位置

図書室の位置を決定する要素は研究員の利用しやすい位置であること、図書室に必要な面積を図書室機能が有効に働くような形状で確保できること、居住環境の良さである。しかし、実施の段階では他の施設の優先権や建築上の都合などにより、理想的な位置へとはならなかった。

当初は研究棟の中心の3階かエレベーターの近くの最上階を希望した。この案は研究部や研究室、実験室の配置が優先された。ついで、

研究棟と管理棟のつなぎ部分の2階を希望したが、会議室に優先権が与えられ、ついに会議室の下の1階と決定した。

1階になると図書室に柱が入り、レイアウト上の不便さが残された。

## 3. 図書室のレイアウト

図書室の利用は蔵書構成や収書状況など内容が決定的要素であるが、レイアウトの良否も大きく影響する。

東北農業試験場, 草地試験場, 植物ウイルス

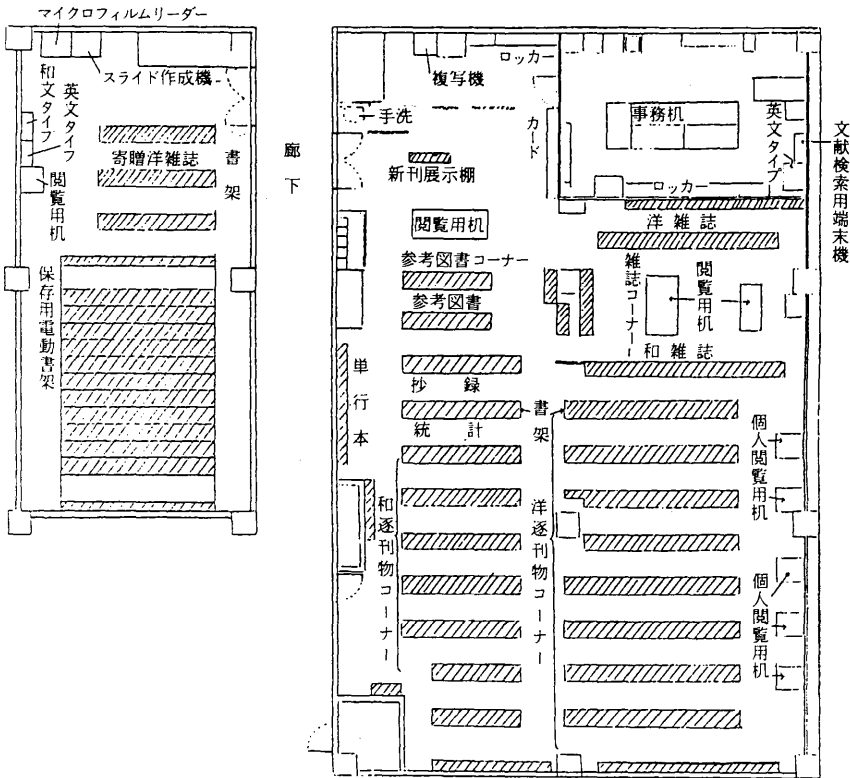


図1 図書室のレイアウト

研究所の図書館建設に参画した経験から、閲覧、展示、収納、複写等の機能を重視した。

図書室(図1参照)の入室者のチェックは事務室に居てもできるように、複写機の騒音を閲覧者からできるだけ離すこと。図書室に入り易い場所にし、快適で他の干渉を受けない閲覧環境にしたいと考えてレイアウトした。

入口を入ると全体が見渡せる。参考図書コーナーは入口の近くに設置した。ちょっと入ってさっと見られることをねらった。参考図書コーナーの前にある閲覧机は、当初新刊書の展示台にする予定であったが、参考図書の閲覧者や、すぐそばにある抄録・索引類の利用者に占領されてしまい、名実ともに参考図書コーナーになってしまった。

雑誌コーナーは新刊の逐次刊行物を収納する書架を間仕切りに利用して設置した。周囲を雑誌架で囲み、中央に閲覧机を配置した。雑誌コーナーへ入ると雑誌の展示閲覧室にいるような感じを受けるようにしてある。

抄録、索引、統計書は参考図書のうしろにコーナーを設けて別置した。さらにそのうしろに和逐刊物コーナーを、雑誌コーナーの隣に製本した洋逐刊物コーナーを配置した。

別室は外国からの寄贈交換図書で利用頻度の低いもののコーナーと保存用の電動書架コーナーがある。

閲覧席は窓ぎわに個人用閲覧机を配置した。個人閲覧機の配置は国際キリスト教大学の図書館から学んだ方法である。

研究機関の図書室では個人用の閲覧室を設置している例を見かけるが、狭い密室は閉鎖的に圧迫感があり、利用頻度も低いように見うけられたので設置しなかった。

図書室内は事務室だけを間仕切り壁で仕切ったが、その他のコーナーは書架や雑誌架、展示棚で仕切る方法をとってある。この考え

かたはノーブラン計画法という図書館建築の計画法である。つまり、図書室の利用法や蔵書の増減等どんな状況変化にも対応して適応できるような方法である。したがって、書架も柱を床に埋め込まず、自立柱で組立て、上部を連結してあるだけである。

余談になるが、自立柱で組み立てて上部を連結して止めた書架は、特に大きな地震でないかぎり、地震に強いことを付記したい。建物の壁に書架の上部を連結したアームに接着したり、書架の柱を床に埋め込むと、地震の振動に対する建物のゆれの周期と書架のゆれの周期が一致しないので、両者の力が干渉しあって書架が破損するようである。建物に直接接続させてないと、連結した書架だけのゆれのため、ゆらゆらとゆれるだけですむようである。

#### 4. 図書室の現況

##### 規模と予算

図書室の面積は408m<sup>2</sup>で収納スペース249m<sup>2</sup>、閲覧スペース121.5m<sup>2</sup>、事務室37.5m<sup>2</sup>、個人閲覧席6、閲覧席14、書架216連、電動書架120連、雑誌架28連である。

現在の蔵書数は、台帳的には単行書19,333冊、製本雑誌14,051冊で合計33,684冊となっているが、図書室として備品台帳に記載しない資料を含めると40,000冊をこえると思われる。

図書購入費は場に配布された経常研究費のなかから、研究推進のための共通経費の一部として年度当初に決定されている。図書購入費のうちわけは、外国語逐次刊行物購入費、国内逐次刊行物購入費、共通図書購入費である。図書購入費の目標は経常研究費の10%という線が経験的に認められている。しかし、畜産試験場のようにウシのような大動物から、

ブタ、ニワトリを多数飼育しなければならないところは飼料購入費を膨大に必要とするため、図書購入費の増額は非常に困難であった。とはいえ、研究員1人当り研究費の配分予算は昭和40年に40万円であったが、毎年5万円平均で増額されていたので、昭和48年に2倍、昭和55年には40年の3倍になっている。物価のインフレ傾向も進行していたので、図書購入費は研究予算の延びに連動しなかったものの整備が進行し、経常研究費に対する図書購入費の比率も昭和43年3.5%、昭和47年5.6%、昭和53年6.5%と増加した。しかし、昭和54年から筑波移転の経費が急増し、図書購入費は前年度なみに据えおかれた。昭和55年から筑波での活動を開始したところ、光熱水料費、建物維持費、施設管理費の飛躍の上昇と国家財政の緊縮化による研究予算の停滞というダブルパンチを受け、図書購入費の削減という事態を生ずるにいたってしまった。

筑波移転準備を開始した昭和54年から逐次刊行物の新規購入を中止していたので、収書調整も必要であった。

図書購入費の総額を減少させ、しかも新規購入をおこなうためには運営方針からの変革が必要であった。筑波に移転したメリットの一つに近隣に農業関係の研究機関があり、共同利用施設の農学情報センターがあるので、図書の相互利用が容易な立地条件にあることであった。また、オンライン文献検索も実用化の時代に入り、CAやBAなどの高額二次資料を購入しなくてもオンライン文献検索で代用でき、しかも、費用も格段に安くてすむことがわかってきた。したがって、CA,BA, B of Aの購読を中止して3,000千円の財源を作り、新規購入誌の増加のための経費とオンライン文献検索費に振りむけ、節減財源も生み出す方法を考え、昭和56年度から実行し

た。

57年度の図書購入予算は13,807千円であったが、年度末に追加配分があったので購入総額は16,220千円となった。

58年度の予算は16,452千円で、内訳は外国雑誌15,222千円、国内雑誌380千円、アドバンス類250千円、共通図書600千円である。

オンライン文献検索は昭和56年度より500千円の予算で開始し、58年度の予算は591千円である。

図書購入予算の削減傾向は国の財政状態から今後も当分の間継続すると思われる。しかし、収集を必要とする新刊雑誌も続々と発刊されているので、予算の延びのなにかぎり購入誌の整理をおこないながら対応する以外に方法はない。まあ、救いは筑波に移転したため、近隣の研究機関の蔵書を相互利用させてもらうのが便利になったことである。CA, BAの中止もオンライン文献検索だけでなく、農学情報センターで収書が継続されているので、現物を見たい時には閲覧も可能になるという事情もあったので研究員からの賛成が得られたのである。

今後、この傾向が続くとすれば、高額二次資料の購入中止などによる財源の捻出方法はすでに限界にきていることもあって、近隣研究機関の収書の相互利用をあてにして、収書を変更する方法で新規発行誌を導入しなければならない事態となろう。そのためには、筑波地区としての収書協定や図書の相互利用などの協力態勢が確立されなければならないであろう。

## 収書

當場のように畜産でも基礎研究の多い研究機関では、専門分野の深化と分化が進むため、収書分野の中はコントロールしておかないと、

次第に広がってゆく傾向がある。したがって、畜産分野を中心にして収書するという方針の確認を次年度の外国雑誌の予約時に図書委員会でする。

また、新規購入を決定した雑誌は3年目に継続可否を審議することになっている。

共通図書の購入は全場員からの希望を集め、資料課内で判断し購入を決定する。以前は図書委員会で決定していたが、図書委員会では図書委員が研究各部の利益代表の性格を發揮し、共通図書費の各部への均等割当てになつてしまい、真に共通的に使うべき図書の購入ができなくなっていたからである。

収書は逐次刊行物に重点がおかれ、図書購入費の96%を占めており、図書室としての単行本の整備は不充分である。単行本の必要なものは各研究室ごとに購入することになっているので、全場的には同一図書を重複購入するケースもしばしばである。しかし、図書室としては畜産の基本的単行書を整備するよう共通図書費を活用したり、年度末の剰余予算の追加配分を受けて整備を進めている。

収書の場合、ねらいをいくつか絞って設定しておく、少しずつではあるが整ってくるものである。

著者の着任した昭和44年から畜産関係の統計書、官公庁の出版資料等の収書に努力した結果、一応整備され、畜産関係の団体等の資料も増加した。官公庁の研究機関では大学と異なり、資料類の利用価値が高く、畜産関係の国内事情を知るうえで重要度が高い。

また、外国語の図書では畜産関係学会のプロシーディングの収書もねらったが、出版社を確定できずに入手できないものが多い。しかし、努力をしていれば多少は収書できるので、研究員から大変よろこばれている。

書庫にあった古い図書を眺めてみると古事

類苑の革装の初版本とかエンサイクロペディアブリタニカの8、12、14版、アルマナックラルース等の百科辞典、広文庫、本草図譜、国譯本草綱目、大日本外国貿易年表が大正2年から昭和12年、陸軍獣医団報など収書の巾の広さに驚かされるばかりである。学術書としても、ハントブーフの細菌学、生理学、化学があり、畜産だけでなく獣医学、化学細菌学、生化学、遺伝学、生物学、植物学、動物学と関連分野を広く収書していたことがうかがえる。しかし、戦後になると巾の広い収書は止り、逐次刊行物中心の収書に移行している。

この経過を見ていると、予算的に余裕もあったからかもしれないが、相当な識見をもって組織的に収書していたと思われる。しかし、戦後の急迫期になるとすべての収集は中断し、昭和40年ころまでは外国からの寄贈に期待したり、最少限必要な外国雑誌の購入だけでのぐ耐乏の時代であったようである。

昭和40年ころから収書の再編成期に入ったのであるが、筑波に移転するにあたり、根本的に収書方針を検討し直す必要が生じたのである。つまり、近くに相互協力できる研究機関の図書室があることを前提に、各機関ごとに分担して収書をおこない、筑波地域全体の収書構成が拡大するような収書をおこなうことである。

#### 資料の整理

筑波に移転して最大の改革は和書の逐刊物をアイウエオ順に配架したことである。

千葉時代の配架は、雑誌類、国立研究機関、公立研究機関、行政官公庁、大学、民間研究機関等の発行機関ごとのグループ別にまとめ、雑誌類はアイウエオ順に、他は地域別に配架されていた。資料や雑誌を受入れ、記帳し、

配架する作業のときは作業の流れに馴れてしまふせいか、なんの不便も感じないようである。しかし、資料を探索するときになると、その資料のグループは何か、地域はどこか、その位置はどこか、何段階の思考を重ねなければならない。特に県の試験場や大学のものを探すときには苦勞させられた。県の場合、46都道府県の順番を北からなぞり、北陸の何県はどこか探すのである。大学の資料のときは、あの大学は何県にあるから、あの地域のあの大学の次と探していかなければならなかった。東京のように大学が多くなると国立大学の配列は文部省の決めた順番で並べ、その後私立大学をABC順に配架していたので、とても複雑であった。

このような複雑さと不便さに、なぜ不平や不満がでてこないかと考えたが、研究員は始めからあきらめて、見つからないものときめ、あてにしていなかったのではないかと思われた。

そこで、すべての和資料を安定したタイトルのあるものはタイトルの、官公庁の資料は省庁や県名の、大学や団体、協会等はその機関名のアイウエオ順に配架したのである。すべてがアイウエオ順であるから、県の次に大学があり、その隣りに協会のものがあった具合である。

もうひとつの面は、外国語の購入逐次刊行物の配架法である。まず書架には雑誌架を使用せず、従来から使用していた7段書架を利用し、仕切りに鉄製のパンフレットボックスを使用した。それと、エコノミーシェルフの棚に仕切り板を入れて区切りとした。これらの書架に版の大きさや厚さに関係なくABC順に配架した。

千葉時代は木製の雑誌架に配架されていたが、版型で上下二段に分かれているため、B

5版とA4版と版の大きさを覚えていないと探せないようになっていた。所在地さえ記憶していればどのような配列でも利用は容易であるという考え方もあるが、案外不便なものである。

筑波移転にあたり雑誌類の配架をいろいろ選択してみたが、すべてが帯に短し襷に長しで、ついに書架利用になってしまった。書架利用の欠点は利用者の閲覧時に、配架位置を移動されることである。したがって、書架内の点検を怠らないで実施しなければならない。

## 5. サービス

現在実施しているサービスは、寄贈・交換受入れの収書案内の発行、日常的なクイックレファレンス、公費支払いによる文献複写依頼、オンライン文献検索等である。

筑波に移転して強化したのは、文献複写依頼とオンライン文献検索である。

### 文献複写

文献複写の費用を公費支払いにすることは手続的に可能であったが、あまり実施されていない。その理由は国立大学の発行する料金の納入告知書にしたがって納入するためには、まず、複写依頼の公文書を作成し、伺いをたて、場長の許可を得ておかねばならない。許可を得てから複写依頼を相手大学の図書館に発送し、複写文献を入手するのである。先方より複写料金の納入告知書が送られてくると、前の複写依頼の伺い文書と照合して支払い手続きがおこなわれ、料金が送金される、という大変複雑な手続きを経なければならない。

会計課にすれば数百円の少額の支払いのために、数万や十数万円の物品を購入するより繁雑な書類の作成を強いられるのは耐えがた

いからであったようである。しかし、複写文献の価値は金額で評価できるものでないことを説明し、庶務課とも協議して実行に踏み切った。

昭和55年の外部への依頼件数は165件であったが、56年には206件と増加した。

文献複写で増加したのは外部からの依頼である。55年は151件であったが、56年333件、57年896件と急増している。増加の原因は筑波地区内の研究機関からと水産研究所からの依頼である。筑波内は距離の近さのあらわれであり、水産は魚も家畜と同じ動物であることからくる近似性と蔵書の少ないためと思われる。

こと複写サービスに関しては、現在のところサービスが輸出超過になっている。サービスの出超をどう受けとめるかは、今後の相互利用を推進するうえで重要な問題である。

図書館の活動を活発にするには、自館に所蔵していないものも他館より取寄せれば、蔵書がそれだけ拡大したことになり、サービスも強化できる、と教えられたが、サービスを受ける側から見ればそのとおりである。しかし、サービスを出す側に立つと、私は私の属している図書館の親機関から雇用されているので、職務に忠実であるためには所属機関の図書館の業務に専念すべきである。サービス拡大のために、他に依頼したサービス量と同量のサービスを他館に対してするのは当然かもしれないが、超過したサービスは、親機関に対しての働きを減らしたことになるのである。超過サービス量が多くなると、他の機関のために人件費や備品や光熱水料を使うことの問題性が大きくクローズアップされるのである。また、超過サービスをさせられているという精神的圧迫は相当なものがある。

したがって、文献複写の相互協力を実行す

るには、お互の連帯感とそれを支えるルールが必要である。

### オンライン文献検索

現在の文献検索作業の手順は次のとおりである。

- ① 文献検索申込書に研究課題、検索したい文献の内容、文献検索に必要と思われる索引語、検索の希望年次、希望データベース名等を記入して提出する。
- ② 申込書を点検し、カテゴリーリスト、キーワード表、シソーラスなどで、研究者の記入した索引語の適否を検討し、検索式を作成する。
- ③ 検索依頼者と協議しながら検索式を検討する。
- ④ できるだけ検索依頼者に同席を求め、検索経過を見ながら依頼者との協議をおこない、検索を実行する。

この手順を採用した理由は専門主題の内容に詳しい研究者の知識とデータベースの特徴やキーワード、カテゴリーコードの内容に詳しい検索者の知識とを組み合わせて検索効率を高めるためである。

畜産試験場で文献検索によく使用するデータベースはCAB, BIOSIS, CASCSEARCH, FSTAである。これらのデータベースは使用すればするほど使いこなしのむつかしさを知らされる思いがする。

CABの場合、さすがに、英連邦が世界各国の植民地に派遣している農業専門家に、必要な最新の情報を提供するために作られていると感じさせられる。というのは、論文内容の主題分析が深いようで、適切なキーワードを組み合わせた検索式であれば、必要な文献の検索ができるからである。育種、酪農、家畜栄養に関係した論文であると、3種の抄録誌



に掲載されるので、同一文献が3件打ち出されるという重複ヒットの例もあるにはあるが、研究者の満足度の高いデータベースである。

しかし、難点が無いわけではない。暑熱のストレスに関する文献の場合、熱やストレスなどの具体的なキーワードのあるものは良いが、畜舎環境と家畜の生理現象のように上位概念語の集合では検索不能になることである。また、家畜管理とか、畜舎の床の構造や傾斜角度のウシの影響などとなると家畜管理、ウシへの影響という語は抽象的すぎるし、床の構造や傾斜角度などはタイトル中に語が使用されていない限りキーワードにならない、上位概念語の場合も困難なようである。

検索の結果を見ていると、このデータベースはどんな過程で作成されているか、収録文献の採択基準、キーワードの選出法と付与数の基準等を知らなければ良い検索ができないのではないかと考えさせられている。

また、農学情報センターに収録されているAGRISを検索する場合、AGRISの入力作業を手伝った経験が非常に役に立つことからも気づかされたことである。

BIOISISの場合、生物学でのオリジナリティを重視しているようで、産業的に重要なもので応用的なものはどの程度のものまで収録しているのだろうかと考えさせられる。

これまで、CAやBA、CABの使い方を新規採用の研究員に指導していたが、オンライン文献情報検索を開始し、さらに冊子体の抄録誌を使いこなすことを上達させねばならないことを思い知らされ、勉強させられた。抄録誌利用の習熟の過程で、研究員に抄録誌の全体の構造をカテゴリーコード、システムティック・コード、コモディティやコンセプト・コードなどの知識の習熟はあまり有効ではないと考えさせられた。研究員が検索する場

合、自分に興味のあるところはくわしく知ろうとするであろうが、全体の構造を知る必要もないし、無駄だと思われる。

これに対し、図書館員は多くの研究員の依頼をこなすために検索経験の蓄積、データベースの構造や特徴、コード類の取扱いの習熟等から検索の専門家になり易いと思われる。しかし、図書館員といえども専門主題知識をもたねばならないので、検索に必要なだけの知識は習得しておかねばならない。

農学情報センターの作成しているAGRIS、RECLASもオンライン検索が可能になるので、利用可能なデータベースが増加し、サービスの幅が広がることになる。

この傾向はさらに進展するであろうから、オンライン文献検索の重要性はますます強まり、優秀な検索者の養成も急務となろう。

#### おわりに

筑波に移転して良かった点は農林水産省以外の研究機関の図書館活動と比較できたことである。比較してみると、多少身びいきな面はまぬがれないが、昭和37年ころからの研究会活動や当時の調査資料課の実施した研修や調査、外国語逐次刊行物総合目録、日本語逐次刊行物目録の作成事業その他の活動により、大いに進歩している点を確認できたことである。図書室の人員や処遇の面でも、内部から見ると不満足な点、処遇の低さなどの問題を感じるが、他省庁と比較してみると主任や司書専門官のポストがあるだけでも恵まれていることがわかった。

このような違いの生じたのは、人材の養成に相当な努力をはらった本省の調査資料課の働きが大きく貢献しているからである。

図書室の活動はこの20年の間に研究員にも認められ、研究のサポート部門として重要性

を重視されるようになってきた。しかし、図書館で働く人達のもつべき能力は何かについてまでの認識はない。研究活動のサポート部門として充分な働きのできるようになるためには、専門主題の知識、外国語、図書館学、端末機を操作するオンライン文献検索などの能力を必要としている。これらの能力は一朝一夕に習得できるものではなく、専門的な訓練の蓄積以外に達成の道はない。この人材の養成の必要性を研究管理者に認識してもらい、養成の面や人事配置にまで留意されるようにならなければ、真の発展はあり得ないと思われる。

また、筑波に移転したメリットは、研究機関が近くに集団化している点である。距離の近さは相互の連絡を容易にし、図書資料の相互利用をやり易くする条件にもなっている。この点を拡大し、研究員にも認識されれば、筑波地域全体という観点から協力態勢をとる考えかたも受入れられ、収書協定なども実現

するのではないかと考えている。

1974年版の農林省試験研究機関等所蔵外国語逐次刊行物総合目録を作成した時のうら話に、農林省関係の研究機関の全体で収集している外国語逐次刊行物の種類は、大学の農学部図書館とは比較にならないほど多いので、研究機関が収書協定をして組織的に収集すれば、すばらしいコレクションが出現するという話を聞いたことがある。この話を聞いた時には、筑波に移転すれば実現可能な条件がそろいそうだと考えたことを思いだしている。

現時点では図書購入費の削減対策として、収書協定とか相互利用が論じられているが、方向は将来に向けて大きな夢を実現させることを考えるべきではないかと考えている。

畜産試験場の図書室の紹介をかね、図書室の将来方向について意見を述べさせていただいた。内容や論旨に不備な点もあるがご寛容いただければ幸いである。

